

Poeの短編における詩的テーマ：美女の死II：肖像としての女性：第三者のナレーターによる構成

大城，房美
九州大学大学院文学研究科：博士課程

<https://doi.org/10.15017/6787004>

出版情報：九大英文学. 33, pp.153-173, 1990-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



Poe の短編における詩的テーマ—美女の死Ⅱ—

肖像としての女性：第三者のナレーターによる構成

大 城 房 美

Poe の作品における女性、特に “The Philosophy of Composition” で述べられている詩的テーマ、“death of a beautiful woman”¹ を実現している短編は、ナレーターとの関わりから、2つの範疇に分けることが出来る。一方はナレーター自身が彼女の恋人であり、夫であって、彼女と直接関わり、運命を共にしながら語ってゆくもので、これには、“Berenice,” “Morella,” “Ligeia,” “Eleonora”を取り上げることが出来る。² もう一方は、ナレーターが、互いに関わりあった男女について第三者の立場から語ってゆくものであり、“The Assigination,” “The Fall of the House of Usher,” “The Oval Portrait”を上げることが出来る。前者の作品群においては、現実と非現実というナレーターと女性の渴望のギャップが恐怖の効果を生み出すという図式が見られる。つまり、ナレーターが美を女性達に投影しその実現を渴望する一方、女性達は美を体現しながらも、ナレーターの語りによって抑圧されたその真の姿においては、生を渴望して蘇ってくるのである。本論は、前者の物語群を1、後者を2とし、後者の構成を持つ物語群を前者に見られるこの特徴と比較しながら進めてゆく。即ち、女性の魅力に屈していないナレーターと、前者の作品群には見られない男性のキャラクターの果たしている役割を考えてゆきながら、それらが同じく詩的テーマを実現するポオの作品の構成にどのような影響を与えているか考察してゆく。

まず、1の作品の特徴を簡単に上げておきたい。これらの短編は、“Berenice,” “Morella,” “Ligeia,” “Eleonora”と、タイトルが全ての女性の名前で始まっていることから、女性自身が生き生きと描写されることが期待される。しかし、ナレーターが彼女等に関わったときの経験を語ってゆくものである故に、彼女等の描写はナレーターの願望が反映された主観的な視点により、真

の姿をありのままに描写されないという抑圧を受けている。背が高く、博学で古典的な顔立ちをしている女性として描かれるその姿は画一的で、台詞は殆どない。また、ナレーターが、狂気の血筋を引くものであったり、阿片を飲むという設定故に、彼女達の真の姿を探ることはさらに困難になっている。

1の物語群は、ナレーターが直接事件に巻き込まれた様を語るという構成を持つ。彼女等の生前には愛を感じていなかったナレーター達は、彼女等の死を契機として、彼女達を追い求める様になる。その姿は、“The Poetic Principle”において、実現不可能と知りながらも天上の美の実現を求めた詩人としてのボオの姿へと通じてゆく。³しかし、彼等の願いを聞き届けるかの様に死の世界から戻って来る彼女達は、実現不可能なことの實現によって、ナレーター達を言い様もない恐怖へと陥れる。即ち、ナレーターにとって美を実現する存在として描かれた女性にみられる願望は、彼の非現実に向かうそれに対し、恋人である彼の存在する地上に踏みとどまろうとするものであったのである。従って、ナレーターの彼女等の死への願望に対し、彼女等には生への意志を見いだすことが出来る。そして一見、Nyna Baymの指摘する様に⁴ 女性は、魂と理想、魂と現実の関係を示す一つ的手段として用いられているにすぎないかの様だが、彼女等はナレーターの意識下において、彼の願望と彼の目の前で実現される彼女達の復活というギャップによって、恐怖の効果を生じさせる役割を果たしているのである。

最も詩的であるとしてボオが“The Philosophy of Composition”において掲げたものと類似の設定を持つ短編としてさらに、“The Assignment,” “The Fall of the House of Usher,” “The Oval Portrait”の3編が上げられよう。これら7編は、「美女の死」を扱うものとして一括して扱われがちであるが、⁵ 私はあえて、先に述べた2つの範疇に分けることにしたい。即ち、第三者のナレーターや、ナレーターとは別に登場する彼女の恋人の役割を果たす男性という設定の違いが、女性をいかに抑圧しているか、また作品の効果にどのような影響を及ぼしているか、そして、その中で女性はどのような役割を果たしているのかを、その視点の違いを通して探ってゆく。

1. 男性の登場

2 の物語においては、ナレーターともう一人、女性に非常に深く関わりのある男性が登場する。そして、2 のナレーターは 1 のナレーターの様に女性への好奇心を満たすために自ら進んで事件へと巻き込まれてゆくのではなく、この男性の執拗な誘いにより、関わってゆくのである。“The Assignment”では、子供が溺れるのを助けてやった若者と、その子供の母親が対話するシーンを目撃したナレーターが、若者の招待を受けて家を訪問する。そしてナレーターは、若者と夫人の関係に興味を覚え、関わってゆく。

Upon leaving him on the night of our adventure, he solicited me, in what I thought an urgent manner, to call upon him *very* early the next morning. (HII, 115)

若者の誘い方を示す “solicit” という言葉には、仕方なく足を運ばずにはいられなかったナレーターの状況を読みとることが出来る。また、“The Fall of the House of Usher” においても同じ様な状況が描かれている。長らく音信不通だった Roderick からの訪問を促す手紙は、ナレーターに躊躇している暇を与えない次の様な性急の手紙であった。

[A] letter from him [Roderick] —which, in its wildly importunate nature, had admitted of no other than a personal reply. (HIII, 274)

また、この 2 編と比べやや特殊な構成を持つ “The Oval Portrait” においても、ナレーターは、傷を負った状態 “desperately wounded condition”⁶ 即ち、外からの一種の強制により、古城に一夜の宿を求めることを余儀なくさせられるのである。これらの男性の招きに応じた時点からナレーターは、彼と行動を共にすることになり、彼の視点から、彼が巻き込まれている事件の内容を推測するしかない立場へと置かれるのである。

男性を通して女性を見るという立場に置かれたナレーターは、女性に対しては何もしてやれず、彼女を見守るしかない。“The Assignment”では、ナレーターは河に浮かぶゴンドラ上にいるのだが、船頭がオールを落としてしまったために、誤って子供を河に落としてしまい途方にくれる母親の姿を見ながら、波に委せてさまようだけである。即ち、船を導くオールをなくしてしまったことには、彼女に対するナレーターの不能が象徴されているといえる。“The Oval Portrait”では時代のずれにより、当然手を差し延べることさえ出来ず、ナレーターは、結果を伝えるのみである。また、“The Fall of the House of Usher”では、ナレーターは Madeline の埋葬の手助けをするが、この行為もロ德里ックの “request” に答えてやったものであり、ナレーターの自発的行動ではない故に、ロ德里ックの行動の一部と見なすことが出来る。

また、1のナレーターが女性達と深く関わっていたのに対し、2のナレーターは、その存在を彼女等に知られてすらいない。“The Assignment”では、ナレーターが女性を目撃したのはゴンドラの上からであり、次に来るシーンは若者の部屋である。そして、ナレーターが会おう機会を得ないうちに、彼女は死んでしまう。“The Fall of the House of Usher”においては、ナレーターは一度生きているマデラインと擦れ違うのだが、彼の語りによれば、マデラインは彼の存在に気づかないで通り過ぎている。

この様にナレーターの方は彼女等の姿を目撃してはいるが、それは一瞬の、或いは非常に限られた彼女等の一面のみを呈した姿であり、いわば動かない、肖像の様なものである。従って、その瞬間で彼女の置かれている立場や心の中を判断して、手を差し延べてやることはナレーターには出来ない。この様に2におけるナレーターと女性の関係は非常に希薄なものなのである。

一方、ナレーターと男性とは、より深い関係にあるものとして描かれている。だが、ナレーターを説き伏せる形で招くなど、男性の方がより強く親愛の情を感じている様に描かれている点には、注目すべきであろう。例えば、下の文に見られる様に、男性の方はナレーターを無二の親友とでも思っているかの様に接している。

The writer [Roderick] spoke of. . . an earnest desire to see me, as his best, and indeed his only personal friend. . . (HIII, 274)

が、一方ナレーターは同じ様には彼のことを思っていない。彼は幾分か男性に対して距離を感じている。

Roderick Usher, had been one of my boon companions in boyhood; but many years had elapsed since our last meeting. A letter, however, had lately reached me in a distant part of the country. . . . (HIII, 274)

また、“The Assignment”においても、この様なナレーターと男性の信頼関係のギャップを見ることが出来る。若者が、ナレーターとの再会に、心から親しみ“great apparent cordiality”を見せ、死の間際の大切な瞬間に招待するのに対し、ナレーターはこの物語を始める前に、彼とは3回か4回は会ったことがあると述べて、彼との距離を強調する。その様な二人の関係は、心を打ち解け合った友人同志というよりも、男性の方が一方的に信頼を寄せ、一方ナレーターは冷静に彼の置かれた状況をなんとか分析し、理解し、出来れば救い出してやりたいと思っているという、医者と患者の様な関係なのである。

1の作品群はナレーターが自分自身について告白するという設定をとる故に一方的に語りを成し、⁷ 彼は読者に聞いてもらう立場にいた。しかし2においては、ナレーターは読者に聞いてもらうだけでなく、自分自身この男性の身に起こったことを聞いてやる立場にいる。即ち、2におけるナレーターは、語り手兼聞き手なのである。そして1においてナレーターの大きな特徴となっている狂気、夢、幻想、女性への傾倒といった冷静さを失わせるもの、最もナレーターの語りを現実とかけ離れさせていた要素は、ナレーターの友人と称するこの男性側に移り、一方ナレーターは、非現実的な事件に巻き込まれそうになりながらも、ぎりぎりのところで冷静な視点を失わずにいる。しかも、医者のような役割を果たそうとしながらも、結局ナレーターは、男性達

の運命の流れを変えることは出来ない。このことは、ナレーターが、傍観者としての視点を、ぐらつかせながらもなんとか守り通せたことを示している。つまり、この男性というキャラクターは、ナレーターと同じ男性であるにも関わらず、作品においては、1において非現実的な要素を体現していた女性側に近い位置を占めているのである。

また、ナレーターと女性の関係は、美を追求する “artist” 芸術家とその “object” 対象という観点から見ることもできる。⁸ 1において、美を求めたナレータを “artist” と設定すれば、その対象は女性ということになろう。だが、1のナレーター達はロデリックの様に自ら筆を持ち楽器を演奏し、詩を読む様なことはしなかった。それは、1においては専ら、女性達がやっていたことであった。その様な実質的な意味で “artist” を設定するならば、むしろ芸術を鑑賞するだけでなく直接実現するリジイアやモレラという女性達の方が才能の上からも “artist” と呼ばれるにふさわしい。しかし、“The Poetic Principle” において “The true artist will always contrive to tone them [Passion, Duty, and Truth] down in proper subjection to that *Beauty*. . .”¹³ であるとしたポオの作品における芸術家とは、美を追求する人々という意味をなす。即ち、彼の選んだ詩的テーマ “death of a beautiful woman” を追求するナレーター達や男性は芸術家といえるのである。

ポオのこれらの作品群におけるナレーターや男女の関係を “artist” とその “object” という観点から考察してゆくと、彼等に担わされた役割の一つが明白になってくる。女性との関係は次の章で考察を加えることにして、まず、“artist” に注目すると、次の2種類に区別することが出来る。即ち、芸術に興味を持ち、理性的に分析しようとする態度を持つ者と、芸術に心酔しそれと自分を一体化させ、人生の目的にしてしまうという態度を示す者である。1の物語においては、この2つの特徴が両方共ナレーターに背負わされていたが、2においては、ナレーターと、男性に2分されている。“The Assignment” において若者は、恋いこがれてやまない女性の肖像画を所有し、ついには、自ら、その恋に身を滅ぼしてしまう。一方同じ部屋に居て、若者の話を聞き、その絵画を見せられるナレーターは、出されて来る芸術作品のすばらしさに驚嘆の色を隠せないが、常に分析する視線を失わず、部屋を “judge” し続け、

若者が物思いに更ける瞬間にはすかさず “a scrutinizing eye”⁹ をもって、彼と彼女の過去を示すと思われる詩を見つけ出すのである。また、“The Fall of the House of Usher” においても同様の状況が見い出せる。ナレーターは、“eye of a scrutinising observer”¹⁰ を持ちながら滞在し、ロ德里ックの正気を保とうと彼を導く。一方、ロ德里ックは音楽や詩作にすばらしい才能を示す。とりわけ、絵画においては “If ever mortal painted an idea that mortal was Roderick Usher”¹¹ という記述も見られる。ロ德里ックは、普通人間が文字にすることの出来ないもの、普通人にとっては非現実の世界にあるものを絵画として、現実の世界に実現させることが出来る人間としてナレーターの目には写っているのである。

男性と同じレベルを共にする芸術家たり得ないナレーターは、男性の行為を言葉にしようとするとき、言葉を見失い当惑してしまう。

I could not help, however, repeatedly observing. . . a certain air of trepidation—a degree of nervous *unction* in action and in speech—an unquiet excitability of manner which appeared to me at all times unaccountable, and upon some occasions even filled me with alarm. [HII, 119, “The Assignment”]

[F]rom these paintings (vivid as their images now are before me) I would in vain endeavour to educe more than a small portion which should lie within the compass of merely written words. [HIII, 283, “The Fall of the House of Usher”]

上述における心理描写は、1 において、例えば “Morella” に見られる様に、ナレーターが女性の博学についてゆこうとしてかなわず、自分にとって意味を成さないその知識が “too unearthly tones”¹² を帯び、恐怖へと変っていった場面でナレーターが経験する心理的圧迫を思い起こさせる。

このようなナレーターの不能と若者の芸術という非現実の世界との接合は、1 におけるナレーターと女性の関係を連想させる。しかも、先に見た様に、

男性自身が、夢、狂気、といった1のナレーターが持っていた非現実に通じる要素を背負うことにより、その性質は、冷静さを持たねば成し得ないナレーターの役割とは全く相入れないものとなっている。しかし、ここで彼が、女性を肖像化する芸術家の位置にいる事を思い起こさねばならない。即ち、この男性というキャラクターは、女性をその対象とする“artist”であると同時に、自分自身もまたナレーターという“artist”の対象となる位置にいるといえるのではないだろうか。次の章では、女性を加えた男性とナレーターの関係やその視点の違いを、“artist”と“object”という関係を念頭に置きながら考察してゆく。

2. 女性と男性達

1の作品群においては「ナレーター対女性＝芸術家対その対象」という関係が単純に成立していたのに対し、2の場合はもう一人の男性という存在故にその組み合わせはさらに次の2通りを考えることが出来る。また「男性である芸術家対女性である対象物」という観点から見れば、「ナレーターともう一人の男性対女性」という関係を作ることが出来る。また、男性が女性と共通点を持ち合わせており、かつナレーターによって語られる存在であることを考えれば、「ナレーター対男性と女性」という関係も考えられるのである。さらにこの関係は「芸術家としてのナレーターとその対象物」と置き換えられないだろうか。“The Oval Portrait”については、そのナレーターの特殊な位置のために、次の章で考察を加えることにして、ここでは“The Assignment”と“The Fall of the House of Usher”の2作品を中心として男女の関わりを見てゆく。

二人は恋人、もしくは兄妹である。始めから互いに愛情を感じているという設定で登場する彼等の関係は、1のナレーターが、始めは女性に対し、好奇心を感じるが愛情は感じていなかったという事実と対照的である。そしてこの二人が密接に精神的に結びつき、互いの存在が互いに影響を及ぼし合っていることは作品の過程でも描かれるが、ラストにおける二人同時の死により強く象徴されている。1の作品群においては狂気や病がもたらされることはあっても、男性に死がもたらされることはなかった。あたかも女性の特権

であるかの如く、死は女性のみにもたらされたのである。そして2において、女性は蘇らない。彼女は男性と完全に一体化してしまったかの様に共に死にゆき、ナレーターの前に蘇りはしないのである。

時を同じくして死んだ男女は、ロマンチックな雰囲気帯びると同時に、ナレーターの視線からはまさに一対の存在として認識される。即ち、その死は二人の類似を、或いは類似した役割を持たされていたことを示唆するのである。“The Assignment”において若者は、“stranger”として登場する。ナレーターは、世間の人々にとってはまだ彼は“stranger”だからそう呼ぶのを許して頂きたいと断っている。つまり、それは、“a person or thing that is unknown”¹⁴という意味で用いられる。しかし、その様なナレーターの弁解も虚しく、ナレーターは結局読者に彼の名を明かさず、“stranger”と6度呼び、“acquaintance”と3度、“friend”と3度、後は“he”で済ませてしまっているのである。それ故、“stranger”は若者を差し示す一種の名前の様な役割すら果たす。しかも、彼の奇妙な部屋や趣味、人柄に関するナレーターの記述を読み進むと、この単語からもう一つの意味を連想させられる。それは、“Ligeia”において、彼女のつかみどころのない美を思う時ナレーターが思い浮かべた次の Bacon の言葉である。

“There is no exquisite beauty without some *strangeness* in the proportion” (HII, 250)

彼は美術品を鑑賞するだけでなく、リジニア同様詩人であったし、また、彼の容貌はポオの描く美女の特徴である “singular, wild, full, liquid eyes,” “curling, black hair,” や “classically regular features”¹⁵を兼ね備えているのである。女性との容貌の類似はロデリックにも認められる。彼は双子である故にその容貌はマデラインと生き写しである。また彼の顔立ちに関する描写は、リジニアのそれとも瓜二つであるという指摘が D. H. Lawrence によってなされている。¹⁶そして、ラストの死の場面において、若者とロデリックが二人共 “rigid” という言葉で形容される死後硬直する様は、女性同様 “marble”、即ち彫像のイメージを担わされているといえる。

また、Person の様に¹⁷この男性の死を、死する女性との最も理想的な関係は死の世界における関係であるという観点から見るならば、この様な二人は共に、ナレーターの視線からは、芸術家の対象物としての同じイメージが重ねられているということが出来る。しかし、この男性というキャラクターは、女性の様に一方的に抑圧され、肖像化されることに甘んじてはいない。女性達はその台詞が皆無に等しかった故に、読者は彼女達の真の姿を垣間見ることさえ困難である。だが、2における男性の台詞はかなりの比重を占め、ナレーターの語りから逃れている。従って、男性と女性の役割の違いは、ナレーターと男性による女性のそれぞれの描写の違いから読み取ることが出来るのである。

2の作品における男性には、1のナレーターと同様、非現実にも身を置く女性、即ち死せる女性像を求める傾向を窺うことが出来る。例えば、“The Assignment”においては、若者は Mentoni 夫人の肖像を所有した、彼女とその子供を思い起こさせる聖母子像の画をナレーターに見せる。ずっと自分は夢の中で暮らしてきたと告白する彼は、その自分しかいない世界の中で恋人を美化し、動かない肖像として愛していたのである。また、“The Fall of the House of Usher”においてロデリックはマデラインが生きていると知りつつ、彼女を埋葬してしまう。自分を悩ませている“peculiar gloom”¹⁸の原因は、最愛のたった一人の身内である妹の病にあると認め涙を流すロデリックは、死して恐怖の犠牲になるであろうと予言し、その恐怖を恐れる。この彼の告白には妹の延命を、彼女と共にいて欲しいと願う彼の気持ちを読み取ることが出来る。彼女と共に居たいと願うと同時に彼女が死の世界へいってしまうことを望むことは、自分をも結果的には非現実の世界へ行かせることを望むことに通じる。また、“The Assignment”においては女性は既に夫をもつ身であり、“The Fall of the House of Usher”ではマデラインは妹である。つまり、彼女と共にいたいという自分の気持を実現に導くことは現実世界におけるタブーとなるという設定がなされている。従って彼等は、彼女等の死せる姿を望むしかない。男性にとって、死は、現実世界から夢の世界への帰還であり、また、現実世界においては叶わない女性との一体化の成就を約束された場所であり、現実にも身を置く彼等にとって、あこがれの対象

となっているのである。

一方、この様に男性によって肖像化されている女性が、ナレーターの視線の中では、生きている女性として描かれている箇所を指摘することが出来る。“The Assignment”において、子供が溺れているのを為すすべもなく見守る彼女の姿を、ナレーターは“marble”という言葉を多用して彫像のイメージで描いているが、若者が子供を助けた後の彼女の表情に次の変化が見られたという。

Her lip—her beautiful lip trembles: tears are gathering in her eyes. . . and see! the entire woman thrills throughout the soul, and the statue has started into life! The pallor of the marble countenance, the swelling of the marble bosom, the very purity of the marble feet, we behold suddenly flushed over with a tide of ungovernable crimson. . . (HII, 113)

彼女が次第に顔を赤らめてゆく上の描写は、子供が助かった安堵の描写というよりは、恋人を認めた喜びという方がふさわしい。“statue-like form”に命を通わせる引金を引いたのは、彼女の肖像を愛し続ける若者であり、その女性に命の通って来る様を認めたのは、その瞬間しか彼女の姿を見ることの出来なかったナレーターなのである。

3. 作品の構成

以上の考察から、2における男性の役割とは、1のナレーターと女性の役割の中間に位置するものであるといえよう。即ち、ナレーターの視点をあやふやなものにしていた狂気や夢といった要素を男性が引き受けることによって、ポオは作品の持つ非現実的な効果を失わせることなく、ナレーターにより冷静な視点を持たせたのである。そしてまた、1において女性に属していた死という非現実的な要素を兼ね備えることにより、男性も女性と共に芸術家の対象物という役割を担わされている。つまりその構成を1の作品にみられる物とは異質にしているのである。

“The Oval Portrait”は「美女の死」を扱った短編7編の最後に発表された作品である。¹⁹ ナレーターが、第三者の立場から語ってゆくという構成を持つ故に2に属する作品であるが、前半と後半ではナレーターが違うという特殊な語りを持つ。前半部は、ある夜、深手を負ったナレーターが古城で一夜を明かすことにし、ベッドの上でその部屋にあった美術品の解説書を読み進んでゆくうちに、偶然その部屋の壁龕に本物と見紛うばかりの美しい女性の肖像画を見つけるという話で、後半部はその美しい肖像画に関するその解説書の部分をそのまま抜き出すという形式をとる。その内容は次の様なものである。画家に嫁いだ美しい少女は、彼が自分以上に愛情を注いでいる芸術に嫉妬心を抱いているが、そのモデルを依頼されると素直に引き受ける。愛故に芸術との葛藤にけなげに耐える少女だが、絵の完成につれ、まるで絵が彼女の生命力を吸い取っていくかの様に彼女の生気は失せてゆく。そしてついに絵が完成した瞬間少女は死にゆき、画家はその絵のまるで命を持っているかの様相に驚きわななく。

この物語の登場人物達は名前を持たない。従って、ナレーター、画家、女性の果たす役割が一般化されているといえる。しかも、7つの作品中最後に発表されたその構成には、それ以前の作品の登場人物達を原型化していると思なすことのできる要素を幾つか指摘できる。また、ナレーターには、女性の肖像画に“interest”を感じ、“criticize”してゆくという姿勢が保たれており、後半部分は本からの引用のみに留まっている故に、ナレーターが“The Fall of the House of Usher”のナレーターの様に事件に巻き込まれそうになるという危険はない。しかも、本の著者としての後半部のナレーターの存在は、それが解説書という枠組みを設定されている故に中立を保っており、ナレーターの存在が語られる男女に直接影響を及ぼす存在となることを免れている。従って、この作品においてはそれぞれの役割がより純粋な条件で分断されていると見なされよう。次にそれぞれの特徴と役割を見てゆく。

まず画家は、先述してきた“artist”の典型として描かれる。女性からの愛を美の世界へ到達するための手段とするその姿勢は、1のナレーターに見られた特徴であるが、それはまた、ロデリックが自分を生かしている一種の手段としてマデラインを見る姿勢や、肖像を所有することで彼女への愛を確か

めてきた The Assignment” の若者の姿勢にも通じてゆく。

“a maiden of a rarest beauty”²⁰ である少女は、“artist” を愛するが故に死にゆき蘇るという 1 の女性達の原型としてみる事が出来る。一方、その姿が現実には肉体を伴って蘇るのではなく、肖像の中に蘇ったかの様であることにとどめられた描写は、芸術の対象物という枠に押し込められ、動かない姿として鑑賞される女性の抑圧された姿を象徴している。

ナレーターは狂気は帯びていないが、“desperately wounded condition” という致命傷を受けており、その肉体は死という非現実の世界と非常に近いところにある。しかも、彼は部屋に飾られた芸術作品に興味を持ち、その解説書の世界へと引きずり込まれてゆく。以上の彼の姿は、非現実の世界にいる女性を狂おしく呼び求めるという 1 のナレーターに通じている。しかし、この物語の後半部は解説書の抜粋部であり、そこにこのナレーターは顔を出さない。だが、その部分は前半部のナレーターが最も興味を抱いた箇所であり、本という枠を持った作品であると考えれば、一種の絵画の様に読者の前に掲げられていると見なす事が出来る。従って、この抜粋部自体が芸術家としてのナレーターの対象物、即ち芸術作品であると指摘することが出来る。

この様にこれら 3 人の役割を原型として、それぞれの作品の登場人物に当てはめてゆくと、それらは、これら 3 人の織りなすヴァリエーションで成り立っていると見なす事が出来る。1 の作品においてはナレーターと女性が登場する。2 においてはそれに “artist” である男性が加わる。そして 1 におけるナレーターは “artist” という男性の特徴を備える。一方、2 において、男性は 1 における女性の美や死という要素を備えている。以上から、これら「美女の死」をテーマとして持つ短編における男性の役割は、ナレーターと女性の間を保つことにあるとより明白に指摘することが出来る。

1 においてはナレーターの一方向的な語りによって作品が構成され、そのため女性達は語りによる抑圧を受けていた。そして、2 においてはこのような男性という中間的存在の登場により、女性は二重の視点から見られることになり、ナレーターと男性という二人の “artist” による二重の抑圧を受けているといえる。しかし、そこには抑圧のみでなく、解放と呼べる彼女の本来の姿が見いだされる箇所も指摘できる。この点に関しては Cynthia S. Jordan の

興味深い次の指摘が上げられよう。

Jordan は、“The Fall of the House of Usher” のナレーターによる語りにおけるマデラインへの抑圧を次の様に指摘している。

[T]he narrator uses languages covertly to relegate Madeline to a passive position in relation to himself, and in the next sentence he tries to exclude her from the text altogether: “For several days ensuing, her name was unmentioned by either usher or myself.”²¹

そして、このような受身形で描かれるという抑圧を受けた彼女の主体性を取り戻しているのはロ德里ックの語りであると彼女は指摘する。

It is Roderick who finally admits to hearing Madeline, and it is Roderick’s growing consciousness of the crime perpetrated against his sister that finally allows her back into the text.²²

彼女は男性の語りにおける女性への抑圧という観点から、その中間に属す“androgynous”としてのロ德里ックの役割を指摘している。即ち彼はナレーターの語りに左右されない自分の台詞の中で、マデラインを死んでいないのに埋葬してしまったという罪を告白しながら、彼女になされたナレーターによる抑圧から解放し、彼女を主体性を持った存在としてテキストに登場させることに成功しているというのである。妹からの逃避をやめ、罪を認めるロ德里ックの視点は、マデラインに関わるまいとしていたナレーターの語りによる支配から脱している。彼の最後の台詞 “MADMAN! I TELL YOU THAT SHE NOW STANDS WITHOUT THE DOOR!”²³ において彼女はもはや受身によって主体性を奪われていない。ロ德里ックの語りの中で描写される彼女の姿は、それを取り戻し自分の意志で立っているものなのである。

またこれに加え、女性を一種の願望を満たす手段として見なす男性の抑圧

から解放された本来の女性の姿をナレーターが見抜いていたという逆の場合を思い起こせば、男性という中間的な存在を持つ2の作品においては、ナレーターの語り自体が一方的な抑圧から成立しておらず、その解放もナレーター側と男性側とから交互に起こっていることも指摘できる。

“The Assignment”においては、若者が肖像を所有していたのに対し、ナレーターは彫像のイメージから脱してゆく生き生きした女性の恋する姿を見抜いている。また、“The Oval Portrait”では、前半のナレーターは少女の肖像に “absolutely life-likeness”²⁴ を見、後半のナレーターは彼女の生き生きした姿を “the young fawn”²⁵ に譬え、無邪気に恋する少女として読者の前に呈示する。一方画家の目には彼女は “Life” を持っていることを意識させない美しい絵のモデルとしか映っていなかったことが、皮肉にも完成した絵を見て叫ぶ最後の彼の台詞 “This is indeed *Life* itself!”²⁶ から読み取れるのである。

男性というもう一人の “artist” が加わったことで、女性は一層芸術の対象物としてみなされるという抑圧を受ける。しかも、ナレーターと直接対話しないことで、彼女は幾重にもヴェールをかぶされた存在となっている。しかし、今まで見てきた様に、2においてはナレーターは男性の視点を介さず、自分の視点を持ったわずかな瞬間に現実の女性の姿を見抜く力を与えられている。そしてその瞬間は、ナレーターがまだ彼女のことを知らない時期に現われている。“The Assignment”では女性をナレーターが見たのは、二人の関係を知らなかった時点であり、“The Oval Portrait”では前半のナレーターは彼女のことを知らず、後半のナレーターも解説書の語りという設定故にその記述は客観性をもって書かれている。即ちそれはナレーターがその女性の置かれた立場などから彼女を判断できる視点をもっていない時であり、それ故に読者はありのままに近い女性像をそのナレーターの観察眼から伝えて貰う事が出来るのである。

“The Fall of the House of Usher”で生きているマデラインとナレーターが出会ったのも、彼がまだ何も知らない時であった。この時の状況をナレーターは、マデラインは自分に気づかずに通り過ぎたと述べている。しかし後に、ロデリックがした告白、自分と彼女の間には不思議な共感 “sympathies

of a scarcely intelligible nature”²⁷ が常に存在していたという事実を考え合わせれば、ロデリックにはマデラインが息を吹き返して棺から身を起し彼のところへやって来る音がずっと聴こえていたという事実同様、彼女もロデリックの身近に居たナレーターの存在に気づいていたのではないかということが暗示される。つまり、ナレーターとマデラインの溝は、ナレーターが彼等の共感を知らなかったという無知に起因している。そしてその無知を作り出したのは、ナレーターに気づかれるまで、双子であることや説明のつかない共感が彼らの間には存在していたことを隠していたロデリックなのである。即ちここでは、Jordan によって指摘された中間的役割を持つ男性の存在によって起こる女性の解放と同時に、同じ男性による女性の抑圧も起こっていることと、逆に女性の解放に一役買っているナレーターの役割を指摘することが出来るのである。

1 の様な一方的な語りでなく、一人の女性を二人の男性が、それぞれの視点から見ることにより、読者は彼女の限られた登場に関わらず、二面から彼女の姿を知ることができる。複数の視線は、女性の姿を面的な肖像の様なものにとどめず、印象深いものとし、また、作品の構成に深みをもたせるという役割も担っているといえよう。

5. 女性の役割

これまで男性との関係から女性達を見てきたが、最後に女性達自身の役割をまとめてみることにしよう。女性像自体は1と2で大差はなく、“a beautiful woman” という一語で総括できる様な描写が施されている。しかし、タイトルが名前で構成されている1以上に2における女性は抑圧された存在である。何故なら、ナレーターは彼女に関する情報をもう一人の男性の口から聞くという構成をとらされているからである。しかしこの様に抑圧された存在でありながら、彼女達は作品の中心に位置する重要な役割を果たしている。それに対し、次の二つの理由を上げることが出来る。一つは彼女達が登場回数は少なく視覚的には限られた存在でありながらも、登場人物達や読者の意識下には常に存在する様に設定されているということであり、もう一つは、建物や美術品といった他の設定に彼女達が深く関わっていることが上げられる。

“The Oval Portrait” で最後には肖像という物体と化してしまった女性の様に、2における女性達は、作品に設定された物体、とりわけそのタイトルとされている対象物と強い結び付きを持っているのである。

“The Assigination” においてはナレーターへの彼女に関する情報は、次の一言 “thou hast conquered—one hour after sunrise—we shall meet—so let it be!”²⁸ を除いては全て他者からの伝え聞きである。しかし、その唯一回の台詞、ナレーターが直接彼女の口から発せられるのを聞いた言葉が彼にとって大きな謎となり、後半部はナレーターにとってこの謎解きの過程であるといえる。そしてラストでその言葉の謎が解ける。

即ち、“one hour after sunrise” という同じ時刻に命を絶った二人の死によってこの物語は幕を閉じるのである。この様に、“The Assigination” においてはまさに約束を示していたたった一つの彼女の台詞がナレーターの興味を引き、この事件をナレーターに書き留めさせたのである。そして、後半のナレーターと若者の会話の部分には実物の夫人は登場しないにも関わらず、前半部でナレーターによって瞥えられていた “marble” のイメージからの類推によって、読者は若者の部屋の壁龕に飾られた肖像画のイメージを前半部でナレーターが描写した夫人の具体的な描写と簡単に結び付けることが出来るのである。

“The Fall of the House of Usher” においては、マデラインがナレーターの視界に登場するのはわずか3回である。しかも、生きているマデライン、死んでいるマデライン、そして蘇ったマデラインという様に、ナレーターはマデラインと最小限度の出会いしか許されていない。だが、この様に登場を限られていながらも、彼女の印象が非常に強いのは何故であろうか。

それは、“The Assigination” の夫人の台詞に代わる様な物語の最初から終わりまで支配している謎が、マデラインに密着した形で存在しているからである。“The Fall of the House of Usher” において、ナレーターの注意を最も引いているのは、タイトルからも分かる様にアッシャーの屋敷である。最初からこの屋敷はナレーターを引き付けている。“House of Usher” という呼び名がその地方の人々にとってその屋敷のみならず住人をも指し示すという事実や、ロ德里ックの確信する建物とその住人の影響関係の話により、そ

の屋敷とアッシャー家の人々の密接な関係は示されている。さらに我々は屋敷を考えると、マデラインと屋敷のより深い関わりを込められた、Sam B. Girgus が指摘する、次の事実に気づくのである。

[F]issure. . . represents the mad line in the self symbolized by the sister's name—Madeline. . . . (italics mine) ²⁹

彼女の名前 “Madeline” は “Mad Line”、即ち、人知れず屋敷を侵食する “fissure” を暗示する。屋敷を崩壊へと導く役割を果たすこの “fissure” をナレーターは、アッシャー家へ到着した時点で、即ちこの物語の最初に既に認めている。

Perhaps the eye of a scrutinising observer might have discovered a barely perceptible *fissure*, which extending from the roof of the building in front, made its way down the wall zigzag direction, until it became lost in the sullen waters of the tarn.
(HIII, 277; italics mine)

そしてまさに、屋敷を崩壊へと導くのはこの “fissure” であったことがラストで描写される。

The radiance was that of the full, setting, and bloodred moon which now shone vividly through that once barely-discernible *fissure* of which I have before spoken as extending from roof of the building, in a zigzag direction, to the base. While I gazed, this *fissure* rapidly widened. . . . (HIII, 297; italics mine)

最初に登場したこの “fissure” が人知れず屋敷を侵食し、次に登場するラストでそれをいきなり崩壊させてしまうほど巢食っていた事実はマデラインがこの二人の男性の意識下に存在し続けていた事実を象徴している。例えば、

ナレーターによる抑圧を示したとされる次の文 “For several days ensuing, her name was unmentioned by either Usher or myself.”³⁰ には、言わないという未行為をわざわざ書き記してしまうほど強く印象づけられた彼女の姿をナレーターの意識下に指摘することが出来る。この様に、彼女等は、少ない描写に関わらず、その作品に深く根付き、継続的に存在し続けることによって、ヒロインとしての座を守っているのである。

Conclusion

男性という中間的立場からの操作が加わることにより、1のナレーターの様に一方的な語りを果たすことの出来ないナレーターの語りは、1と違う性格を帯びる。第三者の立場を与えることによってポオは、彼に冷静な視点が与えられることを可能にした。従って、皆無に近い女性の登場や台詞にも関わらず、読者は瞬間でも真実に近い彼女の姿を垣間見ることが出来る。そしてその姿は肖像という動かないものではなく、生きている女性のそれであった。また、リジニアの様に自分の意志を持った女性であることが強調されず、沈黙の女性として描かれている彼女達は、その存在を二人の男性という複数の視点から描写され、また彼女を取り巻く環境に散在させることによって、アピールしている。そして、作品の深部に設定された彼女達は、作品の最初から終わりまで存在し続けているのである。

この様な彼女達の設定は、詩のみならず、“artist” が構成してゆくものは、ある単一の効果を守ることこそがその作品の成功につながると説いた、ポオの芸術家としての態度を思い起こさせる。即ち、彼女等はポオが “The Philosophy of Composition” で提唱した “under-current of meaning”³¹ の役割を果たしているといえよう。彼女達自体、視覚的に具体的な姿として生き生きと読者の心に伝えられる登場人物の一人というよりも、作品の一連の効果を結びつける働きをしているのである。つまり、彼女達が登場人物の意識下に常に存在し、彼等を取り巻く環境にさえ溶け込んでいる故に、この作品における効果は彼女等に深く結びついたところで生じることになる。彼女達は、一見、肖像としての姿を呈しながらも、実は、作品をまとめる役割を担っているといえるのである。

註

- 1 HXIV,201. 本稿で使用したポオの作品は全て、James A Harrison, ed., *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, 17vols. (NY: AMS, 1965) による。略記号として H を使用した。
- 2 これらの作品については、九大英文学31号に掲載された「ポオの短編における詩的テーマ—美女の死—」を参照されたい。
- 3 ポオは、“The Poetic Principle”において、“Supernal Beauty”と地上の存在である詩人を星と蛾に譬え、その永遠に続くあこがれの状態を人間の永遠性に属する渴望と呼んだ。Cf. HXIV, 273-4.
- 4 Nyna Baym, “Portrayal of Women in American Literature, 1790-1870,” in *What Manner of Women: Essays on English and Emerican Life and Literature*, ed. Marlene Springer (New York: New York UP, 1977) 222.
- 5 「美女の死」のテーマを扱ったものとしては次の論文等挙げられる。
 Person, Leland S. Jr., “Poe’s Fiction: Women and the Subversion,” in *Aesthetic Headaches* (Athens: Georgia UP, 1988) , Kennedy, J. Gerald, “The Horrors of Translation: The Death of a Beautiful Woman,” *Poe, Death, and the life of Writing* (NY: Yale UP, 1987) , Jordan, Cynthia S., “Poe’s Re-Vision: The Recovery of the Second Story,” *American Literature* 59 (1987)
- 6 HIV,245.
- 7 Jordan, 5. “Poe’s villainous narrators in tales like “Berenice,”“Morella,”and “Ligeia” do indeed tell one-sided stories. . .”
 “villainous”という点を除けば、“Eleonora”のナレーターにも当てはめることが出来る。
- 8 Person, 20.
- 9 HII, 121.
- 10 HIII, 283.
- 11 Ibid.
- 12 HII, 28.
- 13 HXIV, 276, “The Poetic Principle”
- 14 *Webster’s Third New International Dictionary*. 1986ed.
- 15 HII, 114-5.
- 16 Lawrence, D.H., *Studies in Classic American Literature*, 1923 (NY: Penguin,1985):

83. 彼はその類似を次の様に指摘している。“Roderick has the same large, luminous eye, the same slightly arched nose of delicate Hebrew model, as characterized Ligeia.”
- 17 Person, 27. “If the most beautiful woman is a dead woman, the best relationship with her must be in death; so the achievement of such an ideal relationship requires the male character’s death, as well as the female’s.”
- 18 HIII, 281.
- 19 それぞれの作品の初版は次の通りである。“Berenice,” *Southern Literary Messenger* (Mar. 1835) ,“Morella,”*Southern Literary Messenger* (Apr. 1835) ,“Ligeia,” *Baltimore American Museum* (Sept. 1838) ,“Eleonora,”*The Gift: A Christmas and New Year’s Present for 1842* (1841) ,“The Assigination,” *The Lady’s Book for January* (1834) ,“The Fall of the House of Usher,”*Burton’s Gentlemen’s Magazine* (Sept. 1839) ,“The Oval Portrait,”*Graham’s Magazine for April* (1842) . 以上 *Collected Works of Edgar Allan Poe*, ed., Thomas Ollive Mabbott (Cambridge: Harvard UP, 1978) による。
- 20 HIV, 247.
- 21 Jordan, 7.
- 22 Ibid, 8.
- 23 HIII, 296.
- 24 HIV, 247.
- 25 HIV, 248.
- 26 HIV, 249.
- 27 HIII, 289.
- 28 HII, 114.
- 29 Girgus, Sam B., “Poe and R. D. Raing: The Transcendent Self,” *Studies in Short Fiction* 13 (1976) : 302. また彼がこの論文で紹介している Joseph J. Moldenhauer(“Murders as a Fine Art,” *PMLA*83 (1968))の指摘するアナグラム “Us -her” も彼女と男性二人の関係を示したものとして取ることが出来る。
- 30 HIII, 282.
- 31 HXIV, 208. ポオは何らかの暗示性 “suggestiveness” が作品全体を通して根底に流れていることが必要であるとし、それを “under-current of meaning” と呼んだ。そして、最後まで読者の興味を引きながらも明らかにされないでいた暗示性がラストで暴露されることによって読者により深い感動を呼び起こすことを意図している。